肉痛，顎運動不全，顎関節疼痛，顎関節雑音，ブラキシズム，外傷性咬合痛などの咀嚼系機能不全の諸症状を示す患者200例に，治療法の一つとして，bite plane の適用を行ったので，その臨床的分析と，製作法について報告する。

我々が行っている bite plane の使用目的と適用症例は，1．顎関節症候群，2．bruxism，3．anterior guidance の欠如による臼歯部負担過重の軽減，4．異常な顎位や筋の過剰運動の是正とトレーニング，5．上下歯牙接触を遮断することにより，生体の持つフィードバックを緩和し，組織の安静をはかる，6．診断を兼ねた可逆療法用装置の一つとして，である。検索症例：58年までに鈴木歯科クリニックを受診した bite plane 適用患者 200例中，122例が女性で，女性の20代から30代で全体の40%をしめていた。来院時に咀嚼系機能不全の自覚症状を持つものは，91例で，他の 109例は術者側から見た適用例であった。自覚症状の中では咬合痛に関するものが最も多く，術者側の適用例としては，筋肉痛，頭痛，耳ナリ，肩こりが多かった。製作時の留意点としては，1．全歯での安定した中心位接触，2．機能的限界運動と調和のとれた前歯誘導，3．前方運動時における全臼歯の離開，4．側方運動時の平衡側離開，等があげられ，full mouth の補綴物製作と同様の注意深さが必要と思われる。全症例中，追跡可能な 124例を調査したところ，症状が改善したにもかかわらず，55例が装着時より継続使用し今後も使用を希望していた。その理由の多くは使用していると体調が良い，眠りが深くなる等であり，歯科治療における生理的，精神面での調和の難しさがうかがわれる。我々は，咀嚼系機能不全の患者に，種々の歯科的治療とともに自律訓練などの精神療法も併用し，現在研究中である。

演題17．レジン修復後の歯髄死に関する臨床的研究

○安藤 良彦，久保田 稔，小林 琢三*

岩手医科大学歯学部保存学第一講座
岩手県盛岡市小林歯科医院*

コンポジットレジンは修復材として使用されて10年以上が経過し，幾多の改良が重ねられ，最も信頼される前歯部審美性修復材の位置を確保するにいたっている。しかしながら，レジン修復には，依然として，辺縁の破折，辺縁の着色，摩耗，さらに歯髄刺激等の臨床的欠陥の存在することが指摘されている。

この歯髄刺激の原因としては，レジン自体からの化学的刺激，辺縁の微少漏洩などが報告されているが，いずれにせよ，歯髄刺激の結果，温熱的変化により痛みを生じたり，甚しい場合には，歯髄が壊死に陥いることが起こりうる。レジン修復後の歯髄死は，レジンの歯髄刺激およびレジン修復の遠隔成績に関する研究の中で触れられているものの，歯髄死を惹起した症例の側からその実態の把握を試みた研究は見あたらないようである。

今回，われわれは，日常臨床において遭遇したレジン修復による歯髄死と思われる22症例について検索し，若干の興味ある知見を得たので，ここに報告する。

結 論

○レジン修復後に歯髄死を惹起した症例の大多数が3級窩洞であり，5級窩洞の症例はなかった。

○コンポジットレジンにおいては，無症状に歯髄死に陥いるというケイ酸セメントの歯髄刺激に似た経過をたどる症例が多く，MMA系レジン修復後の歯髄症状と異なっていた。

○歯髄刺激の懸念される症例には，進んで裏層ないし何らかの歯髄保護処置を行うべきであると考える。

演題18．裏層材の光による変色

○馬場 宏治，加園 真樹，佐藤 保
久保田 稔

岩手医科大学歯学部歯科保存学第一講座

Composite resin は現在，一般臨床に広く使用されている修復物であるが，歯髄刺激に関しては異論のある所である。我々は，この修復物に対し，何らかの歯髄保護が必要であると考えている。Composite resin の変色が問題とされている現在，resin 自体の変色もさる事ながら，resin 以外の変色要因も考えられる。

よって今回我々は，resin 充填の際，よく用いられる裏層材の光による変色について，実験した。

実験に使用した裏層材は，水酸化カルシウム系製材として，Kerr 社製 Life・3M社製 Procal・Caulk 社製 Dycal の3種とリン酸セメントとして，GC社製 Elite 100・ポリカルボキシレートセメントとしてGC社製 Carbolit 100の計5種類を使用した。試験片は内径 5 mmの金属ワッシャー内に，メーカー指示に